日本保育者養成教育学会　ニューズレター

■第８号■

The Japanese Society for the Study on Hoikusha Education

2023 年１２月９日発行　編集・発行　日本保育者養成教育学会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋 2-39-2-401 (株)ガリレオ学会業務情報化センター内

巻頭言

多文化共生保育の中での「友達」

日本保育者養成教育学会

会長　石川昭義（仁愛大学）

仁愛大学のある越前市は人口約８万人のまちで、その約 5%が外国人市民である。そして、外国人市民の約7割はブラジルにルーツを持つ人たちであり、市内にはブラジル国籍の子どもがたくさん在籍している保育園や小学校がある。

先日、保育園でのエピソードを聞く機会があった。園長の報告を要約すると次のようである。

> 日本語には「ふわふわ」とか「すべすべ」「つるつる」といった擬態語が多くある。
>
> 日本の子どもは小さいときから、実物を触り、大人が「このお布団、ふわふわだね。」と言葉をかけることで、実際のふわふわ感を感じとって、それを言葉の使い方として身につけていくようだ。

ある夏の終わりの日、2 歳の子どもが、園庭のプランターに植えたひまわりの茎の部分を触って、「先生、ふわふわしている」と言った。保育者は「ほんとだー、ふわふわしているね。よく気がついたね」とやり取りしていると、周りにいた子どもたちが集まってきて、一緒に茎の部分を触り始めた。「ふわふわしている」「こっちもふわふわ！」と触った感じを連呼。するとその中にいたブラジルの子どももにっこり笑いながら「ふわふわ」と言った。その「ふわふわ」の言葉が次第にそろうようになり、「♪ふわふわー♪ふわふわー」と歌を歌うようなリズム調で楽しみはじめ、友だち同士が顔を見合って、笑い合っていた。

ポルトガル語でも、きっと、この「ふわふわ」感を表現する言葉があると思われるが、この子は、このあと、日常生活の中でどのように日本語としての「ふわふわ」を使うようになるのだろう。考えてみれば、味覚や聴覚でも日本語には微妙な言い回しがあったり、擬音や擬態の言葉があったりする。感覚というものは、人間ならば同じような実感を持って経験されるものなのか、その国や地域に独自の感じ方があるのか、それはわからないが、多文化共生の保育には、感覚的な言語表現の習得のおもしろさと難しさが混在している。

このエピソードでは「周りにいた子どもたち」がいて、みんなで連呼が始まり歌に変わっていったようだ。「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」には、領域「人間関係」をはじめ、たくさんの「友達」が出てくる。「友達との関わりを深め、思いやりをもつ。」はその一つである。多文化共生の保育では、「友達」という言葉づかいは、同じ国籍同士の「友達」、日本人の「友達」など意味が重層的になってくる。「思いやり」の相手も場面によって変わってくる。こうした関わりの中で、「友達」といることの楽しみを味わい、保育者の豊かな日本語での比喩や擬音から刺激を受けて、「友達」同士でおもしろい言語表現を発見していけるといいなと思う。

日本保育者養成教育学会　第8回大会について

日本保育者養成教育学会 第8回研究大会

大会長　宮島　祐（東京家政大学）

日本保育者養成教育学会第8回研究大会は、コロナ禍以来、引き継がれて参りました“WEB（オンライン）”方式ならではの利点を活かし、開催させていただくことといたしました。

第8回研究大会におきましては、大会テーマを「保育者養成教育の近未来」と掲げました。保育者不足を解消するために、保育職の魅力を伝える取り組みが各地で行われ、保育職の仕事の魅力はある程度は伝えられ、キャリアパスや処遇改善制度の創設等により報酬や労務環境は改善されてきてはいます。しかし、その現実がさほど認知されていないためなのか、世間一般にはいまだ保育職の待遇面や労働条件等については、『労多くして功少なし』という印象が根強いようです。

近年の保育者養成校志願者の減少は著しく、一部では保育者養成教育の実施・継続さえ困難になり始めてもいます。加えて、就職後の早期離職、資格保有者の潜在化など、全体的な保育者離れの傾向は続いています。こうした厳しい状況の中で保育者養成教育は近未来をいったいどのように見通すべきなのでしょうか。

本大会のシンポジウムでは、眼下の現実を直視しつつ、保育者養成教育関連の行政・学界・学会を代表する方々それぞれの視座からご発題いただき、保育者養成教育の諸種の難題解決を実現可能にする方略はいかなるものかということについて、真摯かつ闊達な論議となることを願っております。

また、口頭発表・ポスター発表等の各プログラムでは、保育の近未来を担う保育者養成教育のあり方について自由かつ闊達な討議が行われ、充実した研究発表の場となるよう、事務局及び実行委員一同で運営の任にあたって参ります。

たくさんの皆様のご参会を心からお待ちいたします。

特集　保育者養成の周辺　1

保育団体からの保育学生の養成

～保育団体（日本保育協会神奈川県支部）と保育養成校との連携『ふれ合い体験』について～

日本保育協会神奈川県支部・養成校との連携を考えるワーキンググループ

委員長　清水淳一郎（ひよこ第３保育園）

この度、「保育者養成の周辺」と特集の一環で、日本保育協会神奈川県支部（以下、神奈川県支部）が取り組んでいる「ふれ合い体験」の概要、研究について紹介させていただきます。

保育現場で保育養成校との連携が今後必要ではないかという話があり、2010 年に神奈川県支部と神奈川県近郊の保育士養成校との合同会議を企画し、開催しました。その後、毎年合同会議を開催していきました。その合同会議をきっかけに 2013 年より「ふれ合い体験」が始まりました。「ふれ合い体験」は神奈川県支部に「養成校との連携を考えるワーキンググループ（以下、WG）」という委員会が設置され企画・運営が行われています。

初代 WG 委員長の坂本喜一郎先生（当時、RISSHO KID’S きらり相模大野・園長。現在は世田谷区の RISSHO KID’S きらり岡本に移られたため神奈川県支部からは離れられています）が中心となり、神奈川県支部の会員園、神奈川・東京の養成校が協働して、**「気軽に保育園・認定こども園に行き、子ども達とたくさんふれあう中で『子どもたちと関わる楽しさ』や『保育園・認定こども園および保育士の魅力』を体験してもらう」**ことを目的としてスタートしました。これは、評価が伴う保育実習では保育現場・保育学生の双方が保育の魅力の共通理解を行うことができずに、結果的に保育職の道を諦めることになったり、ミスマッチを招いてしまっているのではないかという危機感を神奈川県支部の会員

園、神奈川・東京の養成校の双方が抱いていたことに起因しています。ふれ合い体験では、保育学生を評価することは一切ありません。評価のない環境で、保育学生が自らの実体験を通じた保育の魅力の実感に繋がることを神奈川県支部では会員一同共通の願いとしています。また、多くの神奈川・東京の養成校の温かいご賛同・ご協力なくしては実施することが出来ないことも申し上げなくてはなりません。保育現場と養成校との協働の一つのカタチではないかと考えています。

研究については神奈川県支部の有志による研究グループで、第6・7回の研究大会で、ふれ合い体験の研究発表を 4 演題発表いたしました。以前より、養成校の先生方が、ふれ合い体験に関する研究発表に取り組まれていましたが、保育現場は結果的にお任せするだけの状況にありました。保育者養成において保育現場、養成校の協働の重要性は多くの研究から示されており、保育現場の経験からも明らかであると考えていますが、一歩を踏み出すことが出来ない状況でした。そのような中でコロナ禍となり、保育現場が主体的に行うことが出来る保育者養成への関わりを再考した際に、ふれ合い体験を通して保育現場の創意工夫によって多様な保育士養成のあり方や可能性を引き出すことができるのではないかということを情報発信することを目指して一念発起した次第です。拙い研究発表でお恥ずかしい限りですが聴講した研究者の先生方からは多くの温かい励ましのお言葉をいただき、次への活力としています。

本学会のニューズレター第1号巻頭言で前会長の小川清美先生が、保育現場で実践している職員も自らの実践を振り返り、考察する機会が必要である旨を寄稿されておりました。これは保育における真理を示されたものであると認識しております。今後も、ふれ合い体験の実施と研究発表を通して、保育現場から保育者養成への協働した取り組みを継続していきたいと考えております。

これまでの実践の研究成果はこちら↓（Google drive）

https://drive.google.com/drive/folders/1NcN9m1CTvPOYbJiq2K4N0YipphVJfUXL

特集　保育者養成の周辺　２

保育者として現場に出るための食と栄養に関する学修について

昭和学院短期大学人間生活学科　キャリア創造専攻

准教授　島本和恵

私は児童学科出身の管理栄養士です。児童学科時代に小児栄養という科目がありました。しかし、授業内容は覚えていません（私の勉強不足です）。当時の私もそうでしたが、保育を学ぶ学生にとって食や栄養に関する分野は馴染みが薄いものです。ですから、保育者として現場に出る前に、子どもの心身の健康づくりに不可欠な食や栄養に関する知識はもちろん、保育者自身の健康づくりに必要な食事内容や食生活、調理を体得できるようにアプローチしています。そして、学生自身や子どもたちのこれからの生活に、しぜんと活かされる授業内容を目指しています。そのために、特に、学生自身の食事内容の見直しと調理実習を大切にしています。今回は、この２点について述べさせていただきます。

1. 学生自身の食事内容の見直し

毎年、授業は栄養素や栄養素の代謝、食事内容についての説明から入ります（多くの学校がそうです）。しかし、試験のために授業内容を覚えても、自分の食事に活かされなければ学修になりません。そこで、学生自身が自分の食生活を振り返る授業を行います。

まず、学生に２日間で飲んだり食べたりしたものすべて（水、お茶以外）を写真に撮る課題を出します。写真を見ると、買ってきたもの、外食、自分で作っている場合もあれば、まかない食であったり、家族が作ってくれたものであったりと、様々です。この写真をもとに、手順に従って自分の食事の偏りを確認してもらいます。朝ごはんを食べていない学生、夜遅く賄い食を食べている学生、朝ごはんどころか、まともな食事は１日１回であと

はお菓子や甘い飲み物を飲んでいる学生、1 人暮らしでもちゃんと作っている学生、母親が毎食用意してくれる学生など、いろいろです。

この写真から飲食物を分析して、その内容を振り返ってもらうと、「自分は朝ご飯（炭水化物）を食べていなくて、午後ティーだけしか飲んでないから、脳のエネルギーになる糖質が十分に摂れなくて、午前中にやる気が出なかったり、食物繊維も少ないから便秘がちなのかも…」、「ご飯は太ると思って少ししか食べていなかったけど、ご飯の量が少ないから、糖質摂取としてお菓子を食べていることがわかった。もっと、ご飯を食べるようにしたい。」、「アルバイトが夜 11 時に終わって、そこから賄いを食べる。だから、朝ごはんを食べてなくても痩せないのか…」「食事の量や、緑黄色野菜（鉄が多い）をあまり食べないから、だるかったり、貧血気味なのかもしれない。」など、食品と栄養素、生活リズムが結びつき、いろいろな気付きがみられます。

実際に、食事量が少ない学生は、お菓子や甘い飲みものなどの摂取量が多いです。食事からエネルギーが摂れていないのに、適正体重ということは、お菓子や甘い飲み物で生きているということですね、食べているもので体は作られています。これでは、必要な栄養素が取れませんよね…病気になっちゃう！と少々脅すこともあります。この授業を通して、学生が自身の食生活を振り返ることができるようになるので、学生も私も大変ですが、継続しています。

先日、「先生、食事診断で反省して、ご飯をしっかり食べるようにしたら、お菓子を食べたくなくなって、3 か月で 7 キロ痩せた。食費も節約できた。」と報告してくれたひとり暮らしの学生がいました。これが学修だと痛感しました。

2. 調理実習

私の授業では、離乳食でも幼児食でも調理実習は、必ず大人の食事を作ってから、子どもに合わせた食事へと展開させます。これには理由が 3 つあります。

まず1つは、家族（大人）の味付けから子どもの摂食機能の発達や味覚に合わせた食事に展開する方法を学んでもらうためです。これまで関わった保護者の方を見ていると、家族の食事を調理過程で取り分けて子どもの離乳段階に合わせていた方が、家庭の味、調理方法などに馴染んでいるためか、幼児食に移行した際に食行動の悩みが少ないように感じます。

２つ目は、食事づくりに関する保護者支援に役立てるためです。離乳食と大人の食事の両方を１から作ることは調理の負担が増えます。ですので、保護者によっては、大人の食事のみ調理して、子どもは市販品のベビーフード、反対に、大人は冷凍食品や簡単なもので、ベビーフードを手作りするといったご家庭もあります。特に、市販のベビーフード中心で育ってきたお子さんの場合、咀嚼能力が育たず、食行動に問題が出ている事例が多いように感じます。また、ベビーフードの使用は経済的にも負担がかかります。

上記2点については、味噌汁でも何でも簡単な料理で良いので、大人の食事から取り分け食を作る工夫を学んで欲しいと思っています。

３つ目は、大人１人分の１食の食事量を知ってもらうためです。食事診断で触れましたが、食事よりもお菓子類からエネルギーを摂取している学生は少なくありません。ですので、班の人数分の食事を作り、１人分の量を確認してもらいます。すると、「多い…」と言う学生が必ずいます。コンビニのお弁当類１個のエネルギーを見ても、大学生の女性の１食にも満たないものが多いです。男性であればさらに不足しています。その量が１食として適量と思って欲しくないのです。学生としての身体活動量や基礎代謝量に合った、バランスのよい１食を調理実習で学んで欲しいのです。さらに、調理実習の課題として、自宅で同じものを作り、写真に撮ってレポートを提出してもらいます。ただし、材料は特売品や家族の嗜好に合わせて変更してもよいことにしています。併せて、家族の感想も書いてもらいます。学生寮や自宅で調理が難しい学生には、学校の調理室の使用を認めていただいています。復習として、もう一度作ることによって、調理実習が生活に活きてくるのではないかと考えています。

最後に、私が楽しみにしていることをお話します。それは、調理実習を通して、「やる気」になってくれる学生が現れることです。座学では寝てばかりで、テストの点数も低かった学生が、調理実習になったとたんに活き活きと作業をはじめ、班のメンバーから頼られる存在になります。聞けば事情は様々ですが、普段から調理をしている学生のようです。調理実習をきっかけに、積極的に座学の授業に取り組むようになってきます。その結果、クラス全体の学ぶ姿勢が高まるように感じます。毎年、寝ている学生や授業に集中していない学生がいると、調理実習後の姿が楽しみになります。

これからも、食と栄養を基盤として、保育者養成に携わっていきたいと思います。

特集　保育者養成の周辺　3

子どもも保育者も守る“減災”教育の必要性

特定非営利活動法人　減災教育普及協会

理事長　江夏猛史

関東大震災から100年　保育現場の防災教育の現状

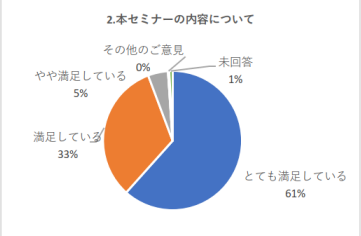
10万5千人以上の人々が命を失った関東大震災から、今年で100年が経ちました。この間にも、地震に限らず日本は幾つもの大災害を経験してきました。被害を受けた街や建物は、その度に被害を詳しく検証し、その検証結果をもとに基準や技術、時には法律までもが見直され、社会全体で再発防止に取り組むための仕組みがある程度確立されています。しかし、そのような仕組みがない防災教育のアップデートは、保育者頼みになっているという現状があります。保育施設で行われる防災教育には、防災訓練、避難訓練、防災絵本や紙芝居の読み聞かせなどがあります。訓練については、実施回数は決められていますが、内容はというと、火災訓練以外は、「保育施設の実態に合わせて考えること」と園側に任されています。防災絵本や紙芝居は、昔から使っているものか、比較的新しいものも、自治体や慈善団体から寄付されたものが使われているケースが多く見受けられます。古いものは当然、最新の知見に基づいて作成されたものではないですし、皆に配られるものは、自園の実態に合わせ作成された教育ツールではありません。

つまり、保育施設で防災教育を展開していくには、情報が古くても、あり物のツールであっても、保育者の工夫で何とかしなければならないという事になっています。そのために保育者は、防災・減災を正しく理解し、様々な情報から自園の実態に合った防災教育を開発し、さらには、子どもの成長や特性に合わせて伝え、理解させるスキルを持っておかなければならないということになりますが、保育者には、そのスキルを身につける機会は与えられていません。そんな状態でいざ災害本番を迎えた時、どれほどの保育者が正しい判断や行動が出来るというのでしょうか。

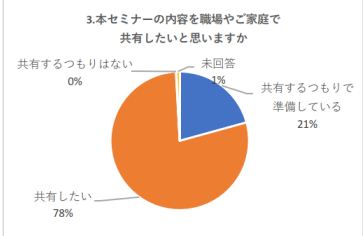
【参考資料】研修参加者へのアンケート抜粋（保育者・教育者向け）

教育者・保育者まとめ　アンケート結果
（対象者1032名）

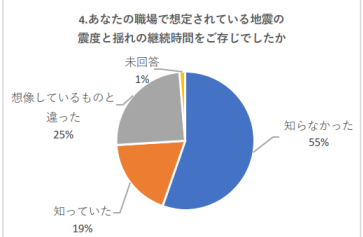
2023/10/10集計　1



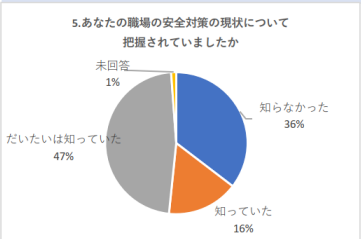
セミナーの内容について	回答数	比率
とても満足している	636	61%
満足している	337	33%
やや満足している	48	5%
不満足	0	0%
その他のご意見	3	0%
未回答	8	1%
総計	**1032**	**100%**



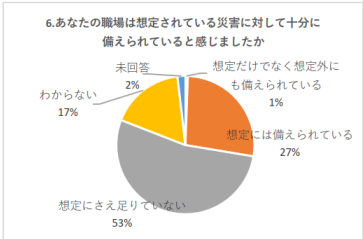
家に帰って内容を共有したいと思いますか	回答数	比率
共有するつもりで準備している	214	21%
共有したい	809	78%
共有するつもりはない	1	0%
未回答	8	1%
総計	**1032**	**100%**



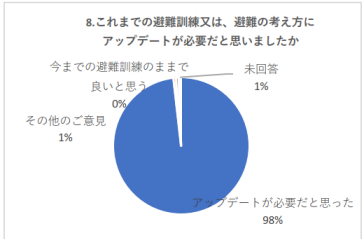
想定されている地震の震度と揺れの継続時間を	回答数	比率
知らなかった	571	55%
知っていた	193	19%
想像しているものと違った	254	25%
未回答	14	1%
総計	**1032**	**100%**



安全対策の現状について把握されていましたか	回答数	比率
知らなかった	365	36%
知っていた	168	16%
だいたいは知っていた	487	47%
未回答	12	1%
総計	**1032**	**100%**



想定されている災害に対して十分に備えられてい	回答数	比率
想定だけでなく想定外にも備えられている	6	1%
想定には備えられている	279	27%
想定にさえ足りていない	550	53%
わからない	178	17%
未回答	19	2%
総計	**1032**	**100%**



これまでの避難訓練又は避難の考え方にアップ	回答数	比率
アップデートが必要だと思った	1013	98%
今までの避難訓練のままで良いと思う	6	1%
その他のご意見	7	1%
未回答	6	0%
総計	**1032**	**100%**

※1%未満の回答は表示上0%になっています。

この資料で、とくに注目していただきたいのは、次の 3 項目です。

4.想定を知らない or 想像していたものと違った <u>80%</u>

5.対策を把握している <u>16%</u>

6.想定に対して対策が足りていない or わからない <u>70%</u>

このように多くの保育者が、想定される災害や対策状況を把握しないまま、防災教育や避難訓練を行っています。その結果、危険な場所へ子どもを誘導したり、子どもの回避行動を制限する姿勢を教えたり、さらには、起こりえない状況を訓練している現場も目にします。これでは、予見可能な災害や、回避可能な危険からも子どもを守ることが出来ず、安全配慮義務を果たすことはできません。

保育者の防災教育アップデートが日本の未来を守る

私たちはこれまで、多くの保育者・教育者に対し研修を行ってきました。研修を終えた参加者の多くは、「防災教育や避難訓練が正しいのかどうかわからない。」「防災マニュアルの内容がこれで良いのかわからない。」「それらを聞ける人がいない。」という悩みを打ち明けてくれます。実は、それと同じように、多くの企業の防災担当者も同じ悩みを持っています。このように、保育者・教育者の「わからない」は、いずれ社会全体の「わからない」につながって行くのです。保育者は、習っていなくても、わからなくても、防災を教えている人です。保育者と子どもの命、そして、保育者を信じる全ての命の責任から、保育者を守るためには、保育者自身が正しい防災・減災の知識を身につけ、根拠と自信をもって防災・減災を教えられるように成長するしかないと、私たちは考えています。

防災と減災

私たちが日常的に使っている“防災”という言葉は、関東大震災以降に使われるようになりました。一説によれば、防災の語源は、予防災害だったそうですが、今日では、「災害を防止すること」（広辞苑第七版）と、“予防”から“防ぐ”という意味になって定着しています。社会の中で実際に使われている防災は、この両方または、どちらかの意味で使われていることが多いですが、保育者養成に関わる皆さんは、この防災という言葉に、どのような意味を持たせて使っているでしょうか。それに対し、減災は、28 年前に起こった、阪神・淡路大震災の教訓として生まれた新しい言葉です。防災という言葉があったのに、なぜ防災よりも言葉としては弱い、減災をつくらなければならなかったのでしょうか。それは、防災の「防げる」には、過信があり、その過信が油断を生み被害を拡大させた一因になったからです。このことから、人々に、過信や油断を抱かせないために、「防げる」の防災ではなく「防げない」「減らすことしかできない」という減災が生まれました。防災になくて、減災にあるもの、それは“被害”です。

“減災”教育は、被害予測力を高める

子どもも保育者も、被害（戦う相手）が予測・理解できれば、必要な備えや、正しい行動を考えることが出来るようになります。これまでの防災教育や避難訓練では、子どもの主体性の欠如、画一的、踏襲型、形骸化が問題だと言われ続けていますが、被害に主眼を置く減災の考え方は、これらの多くの問題を解決し、被害を最小化することが出来るものだと私たちは考えています。

【参考資料】東京都の公立小学校の地震避難訓練の様子

「机に潜りなさい」と言われなくても瞬時に机に潜る子ども
「何のために潜るの？」と聞くと、「頭を守るため」と答えますが、「具体的には何から頭を守るの？」と聞くと、
「わからない」「習ってない」と答える子どもが多い。

＊＊＊

東京都の公立小学校では、東日本大震災以降、年 11 回避難訓練を行うようになりました。単純な反復練習によって、スピードは上がりますが、考える力は奪われていきます。

【参考資料】学校で想定される地震被害

文部科学省が各学校に配布している資料、「非構造部材の耐震化ガイドブック」には、耐震化された建物でも、照明器具、ガラス、天井材、電気設備などの非構造部の危険があるとしていて、さらには、「教師は非構造部材の危険性について把握しておくこと」としています。また、気象庁「震度階級の解説関連表」では、震度 6 以上の揺れは、耐震化された鉄筋コンクリート造建物でも、構造部に被害が出るとしています。

非構造部の被害例（文部科学省）

構造部の被害例（文部科学省）

日本保育者養成教育学会の皆さんへお願い

10 月 12 日に大妻女子大学・保育課程の4年生の皆さんに、減災教育の講義を行いました。（アンケートや感想もご覧ください。）昨年度は、卒業生へのリカレント研修を行ったのですが、その際、「ここで正しいことを学んでも、現場の先輩方の間違いを指摘するのは難しい。」という感想があったからです。大学の講義の中で、あった話であれば、現場の先生方も受け入れやすいと思いますので減災教育を、授業に取り入れていただくことをどうかご検討ください。

私たちは、これまで、多くの保育現場を“減災”という観点から見てきました。その中で多くの保育者の悩みを聞き、アドバイスしてきましたが、いつも思うのは、保育者の負担の多さ、責任の重さです。保育のすべてを支えることはできませんが、減災教育によって、災害安全の部分だけでも保育者の負担が軽減できればと思っています。それにより、保育者とその保育者が育てる子どもたちが、正しく成長し、災害で命を失うことなく楽しい人生を送ってくれることを願っています。

【参考資料】大妻女子大学での講義の様子（2023 年 10 月 12 日）

座学と体験で、保育者に必要な実践的な減災の知識を学びました。

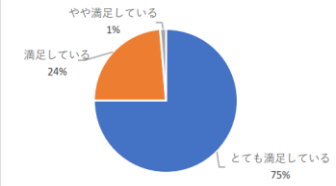
＊講義を行った大妻女子大学のキャンパスで想定されている揺れを体験　首都直下地震　震度 6 強（右写真）

「これまで習ってきた身を守る姿勢では、想定される地震には耐えられない。」学生の感想より

大妻女子大学様　アンケート結果
（対象者76名）

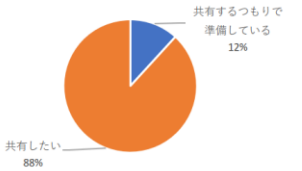
2023/10/12実施　1

1.本セミナーの内容について



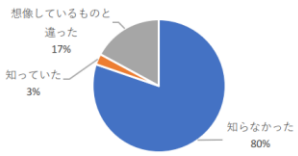
セミナーの内容について	回答数	比率
とても満足している	57	75%
満足している	18	24%
やや満足している	1	1%
不満足	0	0%
その他のご意見	0	0%
総計	76	100%

2.本セミナーの内容を学校やご家庭で共有したいと思いますか



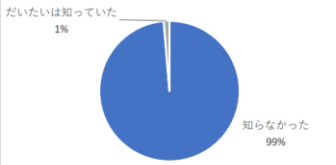
家に帰って内容を共有したいと思いますか	回答数	比率
共有するつもりで準備している	9	12%
共有したい	67	88%
共有するつもりはない	0	0%
総計	76	100%

3.あなたの学校で想定されている地震の震度と揺れの継続時間をご存じでしたか



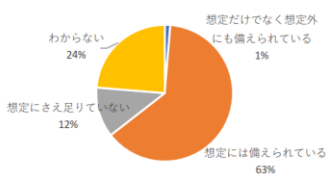
想定されている地震の震度と揺れの継続時間を	回答数	比率
知らなかった	61	80%
知っていた	2	3%
想像しているものと違った	13	17%
総計	76	100%

4.あなたの学校の安全対策の現状について把握されていましたか



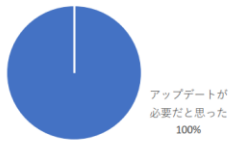
安全対策の現状について把握されていましたか	回答数	比率
知らなかった	75	99%
知っていた	0	0%
だいたいは知っていた	1	1%
総計	76	100%

5.あなたの学校は想定されている災害に対して十分に備えられていると感じましたか



想定されている災害に対して十分に備えられてい	回答数	比率
想定だけでなく想定外にも備えられている	1	1%
想定には備えられている	48	63%
想定にさえ足りていない	9	12%
わからない	18	24%
総計	76	100%

6.これまでの避難訓練又は、避難の考え方にアップデートが必要だと思いましたか



これまでの避難訓練又は避難の考え方にアップ	回答数	比率
アップデートが必要だと思った	76	100%
今までの避難訓練のままで良いと思う	0	0%
その他のご意見	0	0%
総計	76	100%

《学生の感想より》

・実際に東日本大震災を経験した身であるが、防災ではなく減災の意味を知り、本当にその通りだと納得した。防げない災害を目の前に自分がどう動くべきなのか、保育者として現場に出た時、子どもと自分の身を守るためにどう動くべきなのか、しっかり確認していく必要性と、保育者だけでなく子どもたちも一緒に知って考えていく必要性があると実感した。

・実際園の避難訓練も、今まで私の体験してきた避難訓練も、今日習った事は全く実施されていなくて、今日の減災訓練がとてもタメになり、今後セミナーで学んだ事をこれからは共有すべきであると感じました。避難訓練に今までおもきをおいていませんでしたが、将来命を預かるものとしてとても大切なことだなと思います。

・ダンゴムシポーズの危険性を学びました。実際に体験してみないと危険性はわからないから、保育・教育現場でも、今回の様な体験をやった方が良いと思った。

・常識をそのままにせず、アップデートしていく必要があると学んだ。

・保育者は、大勢の子どもの命を守る責任があるということを改めて感じ、予測や対策は十分に行うべきだと考えさせらせた。

・「すべての対策は時間稼ぎ」という言葉が印象に残りました。正しい知識で自分の命、周りの人の命を守れるようになりたいと思いました。

【参考資料】減災教育の一幕

幼稚園で行った子ども向け減災教育の一幕

子どもがとった3つの行動

1.「地震がきたらどうする？」（具体的な行動指示はしない）の声に、真っ先に一つしかないテーブルに向かう子ども達。
テーブルの奥にはグランドピアノ、左側には、対策が取られていないガラスがあります。
当然それらの被害は予想されますが、保育者と園児は、その被害を想定していません。
2. 机にもぐれなかったことで、行き場を失い立ち尽くす子ども。（写真右側）
3. 机にもぐれないことを知り、次候補を必死に探す子ども。（写真左側）

次に、この場所で想定される被害を教えた上で、「地震がきたらどうする？」と言われた子どもたちの行動を撮ってみました。被害を知れば、行動は変わります。避難のゴールは「机の下」ではなく、被害を避けることだと知りました。

どこでも地震体験マット YURETA を使った地震避難訓練の様子（東京都の小学校）

多くの保育園や幼稚園で教えている、机がないときの地震避難姿勢に「ダンゴムシのポーズ」というものがありますが、これはとても危険な指導方法で、文部科学省も否定しています。まず、地震被害が想定できていないことが分かります。また、揺れの中で変化する被害に対応できないので、回避できる可能性がある被害まで回避できなくなってしまいます。

【参考動画】どこでも地震体験マット YURETA 体験の手順

【参考動画】避難訓練 2.0 に取り組む園（高知市の若草幼稚園）

戦う相手を知らずに作戦を立て、訓練を行う保育者や教育者、その教えを信じ、災害本番でも教えられた通りに行動する子どもたち。もしも想定内の災害で保育者や子どもが命を失うことになったとしたら、それは人災になる可能性があります。

正しい行動は、被害で決まります。

自らの被害を出来る限り予測し、幅をもって災害に備える。

これは災害安全だけでなく、子どもの「生きる力」に大きく関わる考え方です。

本学会の皆さんにも、このことを念頭に保育者への減災教育を考えていただければ幸いです。

特定非営利活動法人　減災教育普及協会ホームページ	https://gensai.or.jp/

日本保育者養成教育学会　広報委員

石井章仁（大妻女子大学）　　遠藤純子（昭和女子大学）

小久保圭一郎（倉敷市立短期大学）　　櫻井裕介（野芥ガーデン保育園）